ともに生きる

生き方

ヒューマンドキュメンタリー

小学校高学年　中学校　高校　道徳

ヒューマンドキュメンタリー　48分

ある少女の選択 18歳“いのち”のメール

（2011年放送）

この番組の良さ

生きるということ

「いのちは長さじゃないよ。どう生きるかだよ。」そう語った田嶋華子さん。

幼い頃から重い心臓病に苦しみながらも、最先端の医療でいのちをつないできました。

そんな大きな困難やいたみをかかえる人、そしてその家族が、生きることと真剣に向き合ったドキュメンタリー番組です。

死ぬということ

18歳になった華子さんは、これ以上の延命治療は受けないと、大きな決断をしました。背骨が曲がる病気を併発し、15歳からは人工呼吸器をつけ、声も失いました。

「天国はお疲れ様でしたという場所でもあるから、終わりだけど終わりじゃない。心があるから怖くないんです。」華子さんの遺した言葉や生き方は、家族はもとより、多くの人々に感銘を与えました。

番組活用のポイント

死を考え生を考える

死を考えるということは、生を考えることです。

少女は、余命10年と宣告されながら、最先端の医療技術に支えられて生きてきました。毅然として、そして凛と咲いたひとつの花、田嶋華子さんは18歳の短いその生涯を閉じることになりました。

華子さんの生き方を見つめることにより、生きることの意味や大切さがわかります。

家族について考える

延命治療より、家族との時間を選んだ華子さん。両親の深い愛に包まれ、まっすぐ育った華子さん。その決断を苦渋の思いで受け止めた両親。

家族の絆を見つめることにより、家族愛についてじっくりと考えることができます。

人とのつながりを考える

700通ものメールのやり取りをした野口明子さん。野口さんも7歳の娘を亡くし、辛い思いをしてきました。誰にでも、家族には言えないことがあります。でも、言いたくないのではなく、愛する家族だから言えないのです。野口さんは、華子さんにとって特別の存在でありました。

華子さんを支え続けた医師や看護師の配慮や愛情、ドナー提供をしてもらったドイツの子のためにも、しっかりと生きようと決めた華子さん。

「神様が私にいろいろな病気を与えてくれたことは、恨んだりしていないよ。与えてくれたから、たくさんのいい人たちと出会えたもの。」

「心がつながっているから大丈夫なんですよね。」

遺された言葉を考えることにより、支え支えられることのすばらしさを学ぶことができます。

（溝内正剛）